

心理臨床におけるアタッチメント理論の「現実性」の問題

— 精神分析との対比から —

田附 紘平

1. はじめに

アタッチメントと心理療法の関連は非常に大きい。養育者を初めとする重要な他者（アタッチメント対象）との関係から対人関係の基盤となるアタッチメントが形成されることを考慮に入れると、何らかの形で他者とのコミュニケーションに悩みを抱えて来談されることの多いクライアントとアタッチメントの問題は、程度の差はあれ、切り離すことができないと思われる（Dozier et al.,1999；Slade,1999）。さらに、アタッチメント理論を提唱した Bowlby は、元来精神分析のトレーニングを受けた精神分析家であり、歴史的に見ても著名な精神分析家のうちの 1 人に間違いなく数えられる存在であるため、心理療法の中でも、特に精神分析理論を活用した心理療法（以下、精神分析的な心理療法とする）と関連が深いと思われる。しかし、彼は“精神分析陣営からの徹底的な黙殺”を受けていたと言われるように、アタッチメント理論は主に発達心理学において知見の蓄積がなされており、精神分析の分野で彼の影響力はそれほど大きいものではないとされている（Holmes,1993/1996）。その背景には、アタッチメント理論の持つ比較行動学の視点や養育者との現実での経験の重視などといった特色が、精神分析的な心理療法において重要視される、「内的対象関係」や「ファンタジー」といったクライアントの内的世界の理解や、「転移—逆転移」に代表されるクライアント—セラピスト関係の力動的な理解と相容れないとされているところがあると思われる。しかし、果たして本当にそうなのであろうか。これまでアタッチメント理論を精神分析的な心理療法に役立てようとしている研究は数多くある（Holmes,1998；工藤,2004；Slade,1999；Szajnborg&Crittenden,1997 など）が、その上で避けては通れない、アタッチメント理論が持つ精神分析との相容れなさについて正面から検討し、アタッチメント理論が精神分析的な心理療法へ果たしうる寄与として何があるのかという問題を議論した研究は見当たらない。そこで本稿では、アタッチメント理論のこれまでの変遷や精神分析からの批判をふまえながら、アタッチメント理論が精神分析と相容れない中心的テーマとなっていてと考えられるアタッチメント理論の持つ「現実性」（以下詳述する）の問題について、「現実性」の様相が時代的な変遷によってどのように変化し、それに伴ってアタッチメント理論の精神分析的な心理療法への寄与もどのように変わっているかについて検討することにする。そのことを通じて、心理臨床におけるアタッチメント理論の現在地、そして今後の展望を述べていきたい。そのためにまず、古典的なアタッチメント理論の概略から論じていくこととする。

2. 古典的アタッチメント理論の概略—1940年代—1970年代まで

本節では、古典的アタッチメント理論の概略について、アタッチメント理論を提唱することに至った Bowlby の問題意識やその理論的基盤を中心に論じることとする。その理由は、後述するように、精神分析からアタッチメント理論に寄せられている厳しい批判は、それらに対するものが中心であると考えられるからである。なお、後述するように、1980年代以降のアタッチメント研究は大きく展開しており、そのあり方も古典的なアタッチメント理論とは異なってきていると考えられるため、本節で扱うのは、主に 1940年代～1970年代までのものとする。

アタッチメント理論の萌芽は、Bowlby が行っていた保護施設での子どもたちとの関わりから見出された。それは、常習的な盗癖のある子どものうち、Bowlby が“愛情欠損” (affectionless) と名付けた、他者に情緒的関心を示さないタイプの子ども 16 名中 14 名で、両親との関係破綻が見られ、関係破綻が見られなかった 2 名においても、遺伝要因や両親のパーソナリティの問題が見出されたとしている (Bowlby, 1940)。さらに、保護施設における 44 人の盗癖のある子どもたちに関する研究でも、“愛情欠損”のタイプの子どもにおいて特に両親との長期の分離が見られると指摘している (Bowlby, 1944)。その後彼は、WHO からの要請で施設の生活が孤児に与える影響に関する研究を行った。そこで彼は“乳幼児と母親（あるいは母親代理者）との人間関係が、親密で、継続的で、しかも両者が満足と、よろこびに満たされているような状態が、精神衛生の根本である” (Bowlby, 1951/1967) と述べるように母子関係に注目するようになり、特に幼少期における“母性的養育の剥奪” (maternal deprivation) が今後の孤児たちの人生に多大な損失を与えることを示唆している。このように、Bowlby は、現実生活で経験される、幼少期における両親との分離や母子関係の質が子どもたちの今後を含めた心理状態を決定付ける重要な鍵であると考え至り、その視点がアタッチメント理論の体系化に彼を推進させたと言える。

また、Bowlby がアタッチメント理論を方向付ける上で大きな役割を果たしていると思われるのが、比較行動学を重用したことである。とりわけ Lorenz (1935) による“刻印づけ” (imprinting)、つまりガチョウのひなやアヒルの子が生まれて間もない頃に見た対象に対して後追い行動をすることに影響を受け、Bowlby は、このような幼い鳥や哺乳類の子によるアタッチメント行動が食べ物やその他の報酬が与えられない状態でも生じるということを強調している (Bowlby, 1969/1976)。さらに、Harlow & Zimmermann (1959) によるアカゲザルの実験で、食物はアタッチメント行動をもたらさないが、快適な接触はアタッチメント行動を生じさせることが明らかにされたのを追い風に、Bowlby は、アタッチメント行動は一次的動因にもとづく本能であり、二次的動因とされてきたこれまでの学説を明確に否定しており、このような流れから、Bowlby は、アタッチメントを生命の危険を減じるための本能的な行動システムの所産であるとしている (Bowlby, 1969/1976)。このような考えを前提として、彼は、様々な行動観察における知見をもとに、アタッチメントの危機となるような、アタッチメント対象との分離や対象喪失の際の子どもの反応や、それらがどのようなプロセスで生じるのかについて考察している。分離のプロセスは、子どもは初め激しく抵抗して母親を必死に取り戻そうとする。その後、母親を取り戻すことを絶望するよう見える一方で未だ母親の復帰を望んでいるが、さらに時間が経過すると、母親から情緒的に脱アタッチメントするに至る (Bowlby, 1973/1977)。対象喪失による悲哀のプロセスは、初めに対象の喪失を受け入れられず無感覚になる時期がある。そ

の後に怒りの表現をしつつ行われる失った対象の追求がなされ、混乱や絶望の時期を経て喪失が次第に受け入れられるようになり、再建がなされていく (Bowlby, 1980/1981)。

さらに、Ainsworth & Wiing (1969) によってストレンジ・シチュエーション法が開発され、養育者に対する乳児のアタッチメントパターンを客観的に測定することが可能となったことで、アタッチメント理論は大きく発展していった。ストレンジ・シチュエーション法では、母子の分離とストレンジャーとの出会い、母親との再会が実験状況に組み込まれており、それらへの乳児の実際の反応が観察されることでアタッチメントパターンが同定される。ストレンジ・シチュエーション法の開発後、それ以降の年代においても、ストレンジ・シチュエーション法で測定されたアタッチメントパターンと虐待、不適応、アタッチメント障害など、臨床的に関わる様々な問題との関連について探究が進められている (Egeland & Sroufe, 1981 ; Greenberg, 1999)。

3. アタッチメント理論への精神分析からの批判－「現実性」という視点

以上古典的なアタッチメント理論の概略を述べてきたが、そのような経緯や特徴を持つアタッチメント理論に対し、Bowlby の臨床家としての出発点でもある精神分析の立場から、数多くの厳しい批判がなされている。その批判は、様々な人たちからなされているものの、その内容は共通点も多く、分類としては大きく 2 つに分けることができると思われる。

まず 1 つ目は、現実の過度な重視、つまり内的世界の軽視に関する批判である。Freud, A. (1950) は、Bowlby は外的世界に現れる子どもの行動にばかり関心を向けていることを指摘し、“我々精神分析家は、外的世界で起こる出来事をそのものとして扱っているのではなく、心の中でどのようにそれが影響しているかを扱っているのである”と述べ、Bowlby の態度が精神分析家のものとは異なっている可能性を指摘している。さらに Hanly (1978) は、“Bowlby の理論において実際に起こっていることは、心理力動的な視点を放棄して、外的で、行動的な視点をを用いることである”と述べ、Bowlby に内的世界への関心が見られないという見方を示している。また、人間の心への接近方法について、Altschul (1984) は、“Bowlby の論文は、徹頭徹尾、面接や調査データを重用しており、精神分析的な臨床素材は、回顧的な性質を持つことから先入観が入ってしまうと思っているようだ”と Bowlby の学問的態度に、臨床素材を軽視し、客観的な観察の重視の姿勢を読み取っている。Bowlby と同様に子どもの観察から精神分析に多大な貢献をした Spitz (1960) は、このような行動観察による記述的アプローチの意義を認めつつも、得られたデータを精神分析的に説明することが大切であるとし、Bowlby は行動レベルの記述で終わっているという批判的見解を述べている。このように、精神分析的視点からアタッチメント理論に寄せられる批判の大きな 1 つとして、外的現実を重視し、内的世界にはあまり思いをめぐらせないことが指摘されている。これは、上記の通り、Bowlby の興味が、少年のための保護施設での経験から出発していることが大きいだろう。さらに、その流れから比較行動学を重視し、理論を構築したことが批判を受ける要因の 1 つになっていると考えられる。確かに、これらの批判は妥当な面もあると思われるが、Bowlby は、全く内的世界に関心がなかったわけではなかった。実際、Bowlby は、精神分析の世界において“外的世界に興味を持つ人は、内的世界への興味は持ちえない”とされていたことを嘆き、“精神分析家にとって、子どもが親から実際に扱われているやり方を研究することは、子どもが親に対して持っている内的表象を研究する

ことと同じくらい必要である”(Bowlby,1988/1993)と述べており、現実にも過度に傾倒していたというよりも、これまで重要視されていなかった現実の側面を内的世界と同等に評価されることを望んでいた。とはいえ、第2節でみたように、その後古典的なアタッチメント理論は、現実を重んじる姿勢が特に強調されて発展していったこともまた事実であろうと考えられる。

アタッチメント理論が精神分析から批判を受けている2点目は、理論の単純化とそれに伴う力動的視点の排除についてである。Roiphe (1976) は、子どもと母親の結びつきを本能だとし、分離不安をそのアタッチメントが決裂することへの単なる反応だとする Bowlby と力動的でメタ心理学的な複雑な考えをする Freud,S.を対比させた上で、Freud,S.の考えの“複雑さは、精神生活の複雑さを本当に反映しただけである”として、Freud,S.の考えを支持している。また、Schur (1960) は、Bowlby がアタッチメントに関して本能的に反応する行動システムを想定していることに触れて、すべてが本能に帰するような単純なものではないと主張し、その上で Bowlby の考えは、行動システムによって子どもは母親との絆を築くという極端なものであると述べ、そこで何が起きているかに関する説明がなされていないことを示唆している。Engle (1971) も、そのような理論の単純化に対して、“欲動や心理的な力、したがって力動的で経済論的な視点がなくなっている”ことを指摘し、アタッチメント行動の説明が不十分であるという意見を述べている。このように、Bowlby の主張が、本能によるアタッチメント行動と、アタッチメントの危機や喪失に際しての子どもの反応に焦点を当てていることから、その説明の単純さや内に潜む力動的なメカニズムの説明の乏しさを理由に批判を受けていると言うことができよう。

以上のように、精神分析的な視点からのアタッチメント理論への批判を、内的世界の軽視、理論の単純化とそれに伴う力動的視点の欠如の2点から整理したが、この2点は、裏表の関係にあると思われる。つまり、アタッチメント理論は行動という外に表れている表面的な事柄に焦点を当て、その背景にある内的世界や心理力動には関心を示していないという指摘を繰り返して受けていると言えよう。ここでアタッチメント理論の「現実性」という問題が浮上してくる。ここでの「現実性」とは、「扱っている事柄がどの程度外的な事実在即しているか」であり、ここまでの流れをふまえるとアタッチメント理論の「現実性」は非常に高く、逆に外的な事実の背景にある心理は捨象されていることになる。この特徴は、近年展開されているアタッチメント研究にも同様に当てはまるのだろうか。まずは「現実性」という概念について、これまでの哲学的議論をふまえた上で精緻な検討を行い、1980年代以降のアタッチメント研究をたどりつつ、アタッチメント理論が持つ「現実性」について議論を進めていきたい。

4.「現実性」という概念の検討ー「actuality」と「reality」

これまで、アタッチメント理論の概略やそれへの精神分析による批判からアタッチメント理論の「現実性」という問題が浮上してくることを述べてきた。そこで本節では、「現実性」という概念を精緻に検討することを通じて、概念の整理や明確化をしたい。先ほど「現実性」を「扱っている事柄がどの程度外的な事実在即しているか」と述べたが、「外的な事実」とは一体どのようなものであろうか。それに関わる概念として、「reality」、「actuality」があり、これらにつ

いては、これまで長く哲学的議論がなされている。「reality」¹は、認識論に関わる概念であり、ラテン語で「もの」を意味する「res」から派生した単語であるように、元来は外的に存在している事実を意味していた。しかし、Kant (1787/1937) によって、そのような認識論についての“コペルニクスの転回”が行われ、「現実が認識に従う」とされたことから、「reality」は、外的な事実そのものを表すのではなく、人間の認識が反映され、構築されたものとして理解されるようになった。その後の現象学の発展や Freud.S の「心的現実」の発見を経て、現在では、「reality」は、「当人にとって迫真性を持ったもの」として用いられるようになっている。それに伴って、「actuality」²は、「reality」が元々持っていた外的な事実という意味を担うようになっている。これらをふまえ、以降本稿では、「actuality」を「扱っている事柄がどの程度外的な事実即しているか」、「reality」を「扱っている事柄がどの程度当人の内的世界に即しているか」と定義づけた上で論を進めていくことにする。Bowlby (1988/1993) は、上述のように、「actuality」と「reality」の両方の意義を主張していたものの、古典的なアタッチメント理論が重視する「現実性」は「actuality」であり、精神分析からは「reality」の乏しさを批判されているということが言えよう。したがって、アタッチメント理論と精神分析的視点との相容れなさの1つは、外的現実と内的現実の重視の差、つまり「actuality」と「reality」の間の溝にあると考えられる。

ここで Bowlby が元来持っていた「actuality」と「reality」の視点それぞれが持つ精神分析的心理学療法への意義について、彼の論をもとに検討していきたい。彼は、精神分析において知見を得るために役立つ手段として、自然科学的手法と歴史科学的手法の2つがあることを対比的に取り上げている。彼によれば、自然科学的手法は、“パーソナリティ発達や精神病理を説明する一般原理を理解しようとする限り一例えば、どのような養育形態がどのような種類のパーソナリティをもたらしやすいかを知らうとすれば一必然的に”採用されるものであり、“一般法則を公式化する”ためのものである (Bowlby, 1988/1993)。それに対して、歴史科学的手法は、“任意の個人の個人的問題や、どのような出来事とその発達に影響するかに関心がある限り”採用されるものであり、“単一の特定の出来事をできるだけ詳細に理解しようとする”ものである (Bowlby, 1988/1993)。彼の自然科学的手法と歴史科学的手法の主張は、直接言及してはいないが、それぞれ「actuality」と「reality」の知見を得る方法と対応すると考えられる。つまり、「actuality」の知見は、実際の生活環境がクライアントのパーソナリティ形成にどのように影響を及ぼしているかを理解することに、「reality」の知見は、クライアントが体験してきた個々の出来事がどのような意味を持っているかを読み解いていくことに、それぞれ役立つと示唆される。

以上から、Bowlby 自体は「actuality」と「reality」両方の視点の意義に気付いてはいたものの、実際に発展した古典的なアタッチメント理論と精神分析家たちとの間には、「現実性」に対するスタンスに相当な差異が見受けられる。それではアタッチメント研究がさらに発展していくと、その差異はどのようになっていくのであろうか。次節以降では、近年のアタッチメント研究の流れを追いつつ、そこで扱われている「現実性」の変化について検討することにする。

¹ 「reality」は、『哲学思想事典』によれば、“ideality と対をなし、ideality が意識のうちに観念としてあるあり方を意味するのに対比して、reality は意識とは独立に事物・事象としてあるあり方を意味する認識論的概念である”とある。

² 「actuality」は、『哲学思想事典』によれば、“possibility, necessity と共に事物の存在様相を意味する存在論的概念である”とある。

5. 近年のアタッチメント研究の流れー1980年代以降

1980年代以降のアタッチメント研究における「現実性」はいかなるのものであろうか。様々に展開されている研究の中から、特に「現実性」に関わるものを中心に取り上げて論じていく。

近年のアタッチメント研究の流れを追うにあたって、その転回点の1つに、表象概念の導入があると思われる。Bowlby (1969/1976,1973/1977) は、アタッチメント対象が近くに存在するかどうかに関わらず、恐怖を感じる事態において個人が望む場合にアタッチメント対象に接近可能であり、応答してくれるか、という確信が個人に内面化されていると考え、これを内的作業モデル (Internal Working Model) と呼んだ。このように、内的作業モデル概念は、アタッチメント理論が提唱された当初から言及されていたが、実際に研究でよく用いられるようになったのは、1980年代以降のことである (Bretherton,1990)。これは、内的作業モデルの測定法の発展と軌を一にしている。現状では、多種多様な内的作業モデルの測定法が開発されており、測定法の発展によって内的作業モデルの個人差についての研究が非常に多くなされている (Kobak&Sceery,1988 ; Levy et al., 1998 ; Simpson&Rholes,2002 など)。また、内的作業モデル自体の発展については、認知心理学と相まって様々な複雑な表象システムが仮定されている (Bretherton&Munholland,1999) が、紙幅の都合上その詳細については省略するものの、坂上 (2005) は、様々な研究をレビューした上で、内的作業モデルを“アタッチメントに関する情報への注意や、アタッチメントに関する記憶、感情、行動の体制化をすすめる、大概は無意識的に働く心的ルール”と捉えている。その意味で、アタッチメント研究は、実際の行動だけではなく、個人の内的表象の探究という方向に大きく舵を切ることになった。これにより、アタッチメント研究は個人の内的世界に参入したと言えよう。それに伴い養育者から独立している成人のアタッチメントも研究対象となり、Bowlby が想定していた“ゆりかごから墓場まで” (Bowlby,1988/1993) というアタッチメントの生涯発達を視野に入れた探究が活発化した。さらに、アタッチメント研究は、内的作業モデルと個人の内的力動とも関わる情動制御についての防衛過程の関連を明らかにしている。内的作業モデルのタイプをアタッチメントスタイルに分け、不安定なアタッチメントを示すタイプは、情緒を過度に制御したり、逆に制御が効かなかったりすることが示され、安定したアタッチメントを示すタイプは、適切な情動処理が可能であることが示されている (Cassidy,1994 ; Collins&Read,1990 ; Kobak&Sceery,1988)。

内的作業モデル概念の導入に続いて、大きな進展として捉えられるのは、Adult Attachment Interview (AAI) の開発 (Main&Goldwyn,1984) があろう。AAI は、面接法によって実施され、親との関係に関する語りから、成人のアタッチメントスタイル4つに分類するものである。そこでの強調点は、「語る内容でなく形式」に注目し、親や親との関係に関する記憶や表象へのアクセスの違いという、対象となる人の心的メカニズムを査定することにある。さらに、近年 AAI によるアタッチメントの安定性を表す指標の1つとして注目されているのがメンタライゼーション (mentalization) である。メンタライゼーションは、“意識的または無意識的に自己や他者の心の状態を推測する能力” (Fonagy et al.,1991) とされ、自分や他者を意図や感情や信念を持った存在として認識し、それを想像できる能力と捉えられるであろう。乳児の誕生以前に測定した母親のメンタライゼーション能力は、乳児のアタッチメントスタイルを予見できること

(Fonagy et al.,1991)に加えて、母親の高いメンタライゼーション能力は、その母親が不安定な子どもを育てるリスクが高い環境で育ったとしても、そのリスクを減らし、不安定なアタッチメントの世代間伝達を防ぐとする研究 (Fonagy et al.,1995) も存在している。以上から、AAIやメンタライゼーションの発展は、アタッチメント研究が行動次元というよりもアタッチメントに関わる心理を扱うようになりつつあることを示していると言えよう。

6. 心理臨床におけるアタッチメント理論の「現実性」－「actuality」から「reality」への移行と「reality」の質的差異

前節では、1980年代以降のアタッチメント研究の流れを述べた。第2節における古典的なアタッチメント理論では、「actuality」が非常に高い一方で、前節では「reality」が著しく上昇していると言える。したがって、アタッチメント理論の「現実性」へのスタンスが1980年代を境に大きく変化し、ただ外的な事実在即した知見を提供しようとするのではなく、内的作業モデル、防衛過程、AAI、メンタライゼーションという形で人間の内的世界の理解を目指そうとしている、つまり、「actuality」から「reality」に移行していると言えよう。その意味で、1980年代以降のアタッチメント研究は、Bowlbyが元来持っていた「reality」も捉える視点を再評価し、発展させることに貢献したという意義を持っていると考えられる。そのような変化は、アタッチメント理論が精神分析からの批判に応えるように発展してきたからというよりも、提供している知見そのものの違いによるところが大きい。つまり、古典的なアタッチメント理論では、自然観察や実験的な観察による子どもの行動観察から主に知見が生み出されているのに対し、近年のアタッチメント研究では、人間の表象水準での内的世界をいかに捉えるかという視点から、行動観察によってというよりも、質問紙法や面接法によるアプローチが主となっている。また、研究対象が子どもだけではなく成人にまで広がったこともそのような変化と密接に関わっていると言えるだろう。さらに、アタッチメント理論は、精神分析からの流れ以外に、特に乳幼児－養育者への心理療法に関して独自の寄与をなしている(中尾,2007)ことから、アタッチメント理論が精神分析からの批判に応え、そこへの接近を試みているわけではないことがうかがえるが、結果的にはそのような変化は確実に生じていると考えられる。それにもかかわらず、その変化は精神分析の立場からはあまり考慮されていない。その理由として、第2節で紹介したアタッチメント理論への批判はすべて1980年代までになされたものであり、近年になされた精神分析的な視点からの批判はほとんど見当たらないことが挙げられる。筆者が唯一見つけることができたのは、Lilleskov (1992) によるものであるが、これに関しても Bowlby によるアタッチメント理論の単純化や欲動理論の軽視がその対象となっており、実質的には古典的なアタッチメント理論への批判とみなすことできる。これより、精神分析からのアタッチメント理論の一般的理解として、「actuality」を重視した古典的な理論が念頭にあることがうかがわれ、近年のアタッチメント研究の動向には関心があまり向けられていないようである。

しかし、そのように変化している「現実性」についてももう少し詳細に検討してみると、アタッチメント研究と精神分析との相容れなさが完全に消えているわけではないところが見えてくる。つまり、近年のアタッチメント研究が「reality」を持つようになってきていると言っても、それは、“アタッチメントに関する情報への注意や、アタッチメントに関する記憶、感情、行動の

体制化をすすめる、大概は無意識的に働く心的ルール”（坂上,2005）という内的作業モデルに代表されるように、情報処理論的、制御理論的なものであり、外からの観察によって内的世界が描かれる。一方で、精神分析が主張する「reality」は、主体によって構築される内的世界であり、主体の中にある視点から、内省的、体験的に描かれる。このように、アタッチメント研究と精神分析が扱う「reality」は、同じ「reality」であっても、外側もしくは内側からという内的世界が描かれる視点に差異があると言える。第4節では、「actuality」と「reality」という重視する点で古典的なアタッチメント理論と精神分析との間に相容れなさがあると述べたが、近年のアタッチメント研究と精神分析との間には、「reality」の質という点で相容れなさがあると言えよう。精神分析的な「reality」から見れば、アタッチメント研究の「reality」は、描かれる内的世界の迫真性に欠けており、アタッチメント研究の「reality」から見れば、精神分析的な「reality」は描かれる内的世界の妥当性に欠けていると考えられる。

とはいえ、アタッチメント研究と精神分析の「reality」をめぐる溝は深いと結論付けるのは尚早であるだろう。というのも、精神分析的な心理療法では、クライアントの内側からの「reality」理解が深まることを目指してセラピストは解釈を伝えるが、セラピストは、クライアントを内側から理解しようとすると同時に外在する他者でもあり、解釈を構築する際には、外在する他者として観察したクライアントの外側からの「reality」も大いに助けとなると考えられるからである。つまり、セラピストは、クライアントの語りから得た内側からの「reality」をもとにしながらも、観察によって得た外側からの「reality」を加えることで解釈を組み立てるのである。さらに、精神分析には、Mahler et al. (1975) や Stern (1985) による理論など、観察によって構築された重要な理論が数多く存在しているという事実もある。このように、クライアントの内側からの「reality」を重視する精神分析においても、外側から観察された「reality」と、内側からの「reality」とを照合し、吟味するという営みは必須であると言えよう。この視点に立つと、アタッチメント研究と精神分析それぞれが重視する「reality」は、どちらが大切または優位であるということはいえないであろう。“関与しながらの観察”（Sullivan, 1947）のうち、「関与」も「観察」も非常に大切であって優位関係はなく、むしろ両者を両立させることにその難しさの本質があるのと同様のことが2つの「reality」に言えるのではないだろうか。

ここで、改めてアタッチメント理論の精神分析的な心理療法への寄与について考えてみたい。これまで見てきたように、1980年代を境に「actuality」から「reality」への移行というアタッチメント理論の「現実性」について大きな変化が見られることから、古典的なアタッチメント理論とそれ以降のアタッチメント研究で、精神分析的な心理療法への寄与が異なってくるのが想定される。つまり、前者は、前にも少し触れたが、クライアント理解としての環境要因、特に養育者と乳幼児との現実的な関係がもたらした影響を明確に伝えてくれる一方で、クライアントの内的世界のありように関する豊かな示唆は期待できないと思われる。この点に関して、前述のように様々な鋭い批判がアタッチメント理論に寄せられている。しかし、近年のアタッチメント研究では、「reality」が中心に扱われ、クライアントの内的世界への理解に寄与することが可能となったために、その視点を精神分析的な心理療法に役立てようとしている研究が数多く存在していると言えよう。ただ、それは「外側から」のクライアントの「reality」理解であり、クライアント本人の体験としての「内側から」の理解ではない。そこに精神分析的な「reality」

との相容れなさがある。その一方で、上述のように、精神分析においても、「内側から」の理解を深めるために、「外側から」の理解を役立てることは重要であろうし、どちらの側から見たクライアントの内的世界も、クライアントの心のありようを表すものに他ならない。両側から見ることで、より立体的にクライアントの内的世界を描くことができると思われる。その意味で、この両者の「reality」は、相容れないというよりも、相補的ということになるのではないだろうか。以上から、アタッチメント研究は、セラピストにクライアントの「外側から」の理解を提供し、それを助けにセラピストは「外側から見たクライアントの内側から」のより適切な理解を構成することが可能となるという意味で、精神分析的心理療法に寄与すると考えられる。

最後に、「reality」をめぐるアタッチメント研究の精神分析的心理療法への寄与についての今後の展望を考えてみたい。これまでは、クライアントの内側もしくは外側という、クライアントの「reality」理解における視点の差異を議論してきたが、新たにもう 1 つ、そのような視点の差異がない、心理療法場面に生じていること全ての「reality」を注視していくスタンスが今後重要視されていく可能性がある。その新たな「reality」を考えるにあたって、精神分析の関係論的な視点に立つ Wallin (2007) の試みは、非常に示唆的である。彼は、クライアントが持つ内的作業モデルによって、心理療法場面で行われる非言語的コミュニケーションが異なっており、その相互作用をいかに力動的に読み解いて治療的に介入するかについて事例を挙げながら示している。Wallin は、投影同一化 (projective identification) を“非言語コミュニケーションの 1 つの様式でもある”と述べた上で、“患者の非言語的コミュニケーションを受け止めるためには、私たち自身の内側において彼らの反響を認識することを身につけなければならない”と指摘しており、クライアントの内的作業モデルの違いを考慮に入れながらセラピストの内側に生じる情緒を治療的に活用することを示唆している。このようなセラピスト側の情緒への気付きについて、彼は逆転移というよりも、クライアントとセラピストが、その場において双方向に影響し合って構成しているものを知る手がかりという捉え方をしており、そこには心理療法場面内という視点しかなく、クライアントの内側、外側といった差異はない。つまり、新たに獲得される「reality」とは、「クライアントーセラピスト関係を中心とした心理療法場面に生じていることへの reality」であると思われる。ここに至ると、アタッチメント研究は元々相容れないとされた精神分析の対象関係論とさらに接近する。近年の対象関係論を代表する Joseph (1985) の“total situation”という概念は、セラピストの存在や介入をも含む分析場面すべてがクライアントの内的対象関係の表れであるという考えであり、その内的対象関係を読み取っていく態度は、クライアントの「外側」、「内側」という区別がない新たな「reality」を追求することと酷似していると思われる。ただ、そこでのアタッチメント研究の特色は対象関係論とは異なり、ある程度の「actuality」や外側からの「reality」の視点を有している点にあるだろう。

以上から、今後、心理療法場面でアタッチメント研究が新たな「reality」を追求することになることで、元来相容れないとされた精神分析的心理療法とさらに接近することが可能になるであろう。このような研究が増えていくと、アタッチメント研究の精神分析的心理療法への寄与は、1980 年代からの流れに区切りがつけられ新たなフェーズを迎えることになるだろう。

7. おわりに

本稿では、まず古典的なアタッチメント理論を概観し、そこに寄せられている精神分析からの批判を取り上げ、精神分析とアタッチメント理論の相容れなさを2つの「現実性」である「actuality」と「reality」それぞれの重視という点から明確にした。さらに、その相容れなさは、「actuality」から「reality」への移行という近年のアタッチメント研究の流れによって一部克服され、その移行は Bowlby が元来持っていた「actuality」と「reality」の両方の視点の再評価を意味していることを明らかにした。しかし、近年のアタッチメント研究と精神分析には、主体の外側あるいは内側からみた視点の差異という、「reality」の質的差異が見られることを示し、いまだに相容れなさを有してはいるものの、クライアントの内的世界の理解を深める上で相補的な意義も持っていることを考察し、新たな「reality」の獲得というアタッチメント研究の今後の展望を述べた。本稿で導入した「現実性」概念は、哲学的な問いを含み、またアタッチメント研究の認識論とも大きく関わっているため、議論がやや肥大化した感も否めない。しかし、アタッチメント研究と心理臨床実践との間の隔たりは大きい（工藤,2005）ため、致し方ない部分もあると思われる。知見の実証性を求める現代の要請に応えるためにも、実証的知見が豊かなアタッチメント研究と、個別性を重要視し、そこに生じている意味を丁寧に読み解いていく心理臨床実践との間の隔たりを埋めていく試みは、ますます重要な意義を持つてくるであろう。

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科大山泰宏准教授に深く感謝申し上げます。

引用文献

- Ainsworth, M, D, S., & Wiing, B, A. (1969) : Attachment and the exploratory behavior of one -year-olds in Strange Situation. Foss B,M.(Ed.) *Determinants of infant behavior(Vol.4)* Methuen. pp.113-136.
- Altschul, S. (1984): Attachment and loss, Vol. 3. Loss, Sadness and Depression: By John Bowlby. Basic Books, 1980, 472 pp., \$22.50. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **32**,216-218.
- Bowlby, J. (1940): The Influence of early environment in the development of neurosis and neurotic character. *International Journal of Psycho-Analysis*, **21**,154-178.
- Bowlby, J. (1944): Forty-Four Juvenile Thieves. : Their Characters and Home-Life *International Journal of Psycho-Analysis*, **25**,19-53
- Bowlby, J. (1951): *Maternal care and mental health*. Ganeva: WHO Monograph. 黒田実郎（訳）（1967）：乳幼児の精神衛生 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1969): *Attachment and loss, vol.1 Attachment*. Hogarth Press, London. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）（1976）：母子関係の理論Ⅰ：愛着行動 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1973): *Attachment and loss, vol.2 : Separation Anxiety and Anger*. Hogarth Press. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）（1977）：母子関係の理論Ⅱ：分離不安 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1980): *Attachment and loss, vol.3 : Sadness and Depression*. Hogarth Press. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）（1981）：母子関係の理論Ⅲ：対象喪失 岩崎学術出版社.

- Bowlby, J. (1988): *A secure base. Clinical applications of attachment theory*. Routledge. 二木武 (監訳)
(1993) ボウルビー 母と子のアタッチメント 心の安全基地 医歯薬出版株式会社.
- Bretherton, I.(1990): Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal* **11**(3), 237-252.
- Bretherton, I. & Munholland, K.A.(1999): Internal working models in attachment relationships: Elaborating a central construct in attachment theory. Cassidy, J., & Shaver, P.R.(Eds.): *Handbook of attachment-theory, research, and clinical applications*. Guilford Press.
- Cassidy, J.(1994): Emotion Regulation: Influences of Attachment Relationships. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **59**, 228-249.
- Collins, N.L. & Read, S.J.(1990): Adult attachment, working models, and relationship quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**(4), 644-663.
- Dozier, M., Stovall, K.C. & Albus, K.E.(1999): Attachment and psychopathology in adulthood. Cassidy, J., & Shaver, P.R.(Eds.): *Handbook of attachment-theory, research, and clinical applications*. Guilford Press.
- Egeland, B., & Sroufe, L.A.(1981): Attachment and early maltreatment. *Child Development*, **52**, 44-52.
- Engel, G. L.(1971): Attachment behaviour, object relations and the dynamic-economic points of view—critical review of Bowlby's attachment and loss. *International Journal of Psycho-Analysis*, **52**, 183-196.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Leigh, T., Kennedy, R., Mattoon, G., & Target, M.(1995). Attachment, the reflective self, and borderline states: The predictive specificity of the Adult Attachment Interview and pathological emotional development. Goldberg, S., Muir, R., & Kerr, J.(Eds.)(1995). *Attachment theory: Social, developmental, and clinical perspectives*. Analytic Press.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Moran, G.S., & Higgitt, A.C.(1991). The capacity for understanding mental states: The reflective self in parent and child and its significance for security of attachment. *Infant Mental Health Journal*, **12**(3), 201-218.
- Freud, A. (1960): Discussion of Dr. John Bowlby's paper. *Psychoanalytic Study of the Child*, **15**, 53-62
- Greenberg, M.(1999): Attachment and psychopathology in childhood. Cassidy, J., & Shaver, P.R.(Eds.): *Handbook of attachment-theory, research, and clinical applications*. Guilford Press.
- Hanly, C. (1978): A critical consideration of Bowlby's ethological theory of anxiety. *Psychoanalytic Quarterly*, **47**, 364-380.
- Harlow, H. F. & Zimmermann, R. R.(1959): Affectional responses in the infant monkey. *Science*, **130**, 421.
- 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末本文美士 (編) (1998) 哲学・思想事典 岩波書店.
- Holmes, J.(1993): *John Bowlby & Attachment theory*. Routledge, London. 黒田実郎・黒田聖一 (訳)
(1996) : ボウルビーとアタッチメント理論 岩崎学術出版社.
- Holmes, J.(1998): Defensive and creative uses of narrative in psychotherapy: An attachment perspective. Roberts, G. & Holmes, J.(Eds.) *Narrative in psychotherapy and psychiatry*. Oxford University Press.
- Joseph, B.(1985): Transference: The total situation. *International Journal of Psycho-Analysis*,

66,447-454.

- Kant, I.(1787): *Kritik der reinen Vernunft*.. 天野貞祐 (訳) (1937) : 純粹理性批判. 岩波書店.
- Kobak, P.R. & Sceery, A.(1988): Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation, and representations of self and others. *Child development*,**59**,135-146.
- 工藤晋平 (2004) : 「見立て」における成人愛着スタイルの利用とそのアセスメント——語りおよび治療者の情緒的反応から見た特徴 心理臨床学研究,**22**(4), 406-416.
- 工藤晋平 (2005) : リサーチと精神分析臨床との間：アタッチメント理論を中心に 臨床心理学,**5**(5), 643-648.
- Levy, K.N., Blatt, S.J.&Shaver, P.R.(1998): Attachment styles and parental representations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**(2),407-419.
- Lilleskov, R. (1992): Attachment in the preschool years: Theory, research and intervention: Edited by Mark T. Greenberg, Dante Cicchetti & E. Mark Cummings. Chicago and London: The University of Chicago Press. 1990. Pp. 507. *International Review of Psycho-Analysis*, **19**,126-129.
- Lorenz, K. Z.(1935): *Der Kumpan in der Umwelt des Vogels*. Schiller,C. H.(Ed.&trans.) *Instinctive behavior*. International Universities Press.
- Mahler, M.S., Pine, F., & Bergman, A.(1975): *The psychological birth of human infant*. Basic Books.
- Main, M,&Goldwyn, R.(1984): Adult attachment scoring and classification system. Unpublished manuscript, University of California.
- 中尾達馬 (2007) : 5-1 乳幼児—養育者へのアタッチメント理論を応用した治療・介入 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房.
- Roiphe, R.(1976): Attachment and loss, Volume II. Separation. Anxiety and Anger: By John Bowlby. New York: Basic Books, Inc., 1973. 444 pp. *Psychoanalytic Quarterly*, **45**,307-309.
- 坂上裕子 (2005) :アタッチメントの発達を支える内的作業モデル 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント—生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.
- Schur, M.(1960): Discussion of Dr. John Bowlby's Paper. *Psychoanalytic Study of the Child*, **15**,63-84.
- Simpson J.A.,&Rholes, W.(2002): Fearful-avoidance, disorganization, and multiple working models: Some directions for future theory and research. *Attachment & Human Development*,**4**(2), 223–229.
- Slade, A.(1999): Attachment theory and research.: Implications for the theory and practice of individual psychotherapy with adults. Cassidy, J., & Shaver, P.R.(Eds.):*Handbook of attachment-theory, research, and clinical applications*. Guilford Press.
- Spitz, R, A.(1960): Discussion of Dr. Bowlby's Paper. *Psychoanalytic Study of the Child*, **15**,85-94.
- Stern, D, N.(1985): *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. Basic Books.
- Sullivan, H.S.(1947): *Conceptions of modern psychiatry*. White Psychiatric Foundations.
- Szajnberg, N.M.&Crittenden, P.M.(1997): The transference refracted through the lens of attachment. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis*, **25**(3), 409-438.
- Wallin, D,J. (2007): *Attachment in psychotherapy*. Guilford Press.

(心理臨床学講座 博士後期課程 1 回生)

(受稿 2014 年 9 月 1 日、改稿 2014 年 11 月 20 日、受理 2014 年 12 月 26 日)

心理臨床におけるアタッチメント理論の「現実性」の問題

ー精神分析との対比からー

田附 紘平

本論文は、心理臨床におけるアタッチメント理論の寄与を議論するにあたって欠かせない「現実性」の問題について、アタッチメント理論の変遷と、精神分析からのアタッチメント理論への批判を通じて検討を行った。それにより、古典的アタッチメント理論は、外的現実である「actuality」重視であったが、近年では、心的現実である「reality」の探求が中心となっており、精神分析への接近が見られた。これは、両者の意義を元来から主張していた Bowlby を再評価する意義を有していた。しかし、アタッチメント理論と精神分析が扱う「reality」は同一ではなく、対象の内外のどちら側から「reality」を描くかという視点の差異が見出された。精神分析的な心理療法においては、両者の「reality」は、相容れないものでありつつも、相補的な意義も有していることが認められ、外側から「reality」を描くアタッチメント理論は、セラピストがクライアントの内側からの「reality」を理解する際に役立てられることが示された。

The Problem of “Actuality / Reality” of Attachment Theory in Clinical Psychology : In Comparison with Psychoanalysis

TAZUKE Kohei

This paper examines the “actuality/reality” of attachment theory in clinical psychology through the historical transition of attachment theory and the severe criticisms of attachment theory from the psychoanalysis. The results showed that the classic attachment theory made a point of “actuality”—the degree that it was based on external fact—, but modern attachment theory has made a point of “reality”—the degree that it was based on the inner world. This meant the reevaluation of Bowlby, who insisted on the importance both of “actuality” and “reality.” However, “reality” for the modern attachment theory and that for psychoanalysis were not same, and there was a difference in viewpoint from which “reality” was described. It was found that in psychoanalytic psychotherapy, both “realities” were exclusive but complementary, and attachment theory, which described “reality” from the outside, helped a therapist with understanding a client’s “reality” from the inside.

キーワード： アタッチメント理論、精神分析、現実性

Keywords: attachment theory, psychoanalysis, actuality / reality

